

次世代のメディアセンターとは - フィンランドの図書館から考える -

ひろせ ようこ
廣瀬 陽子

(湘南藤沢メディアセンター所長)



慶應義塾はインターネットが一般化する前から、時代を先読みし、図書館を「メディアセンター」に変えた。筆者が学部生、教員として過ごしてきた湘南藤沢キャンパス（SFC）のメディアセンターは、開設当初はワークステーションがすらりと並び（現在は個人所有のPC使用が基本）、AV施設が充実し、いわゆる普通の図書館とは全く異なっていて驚かされたが、その後、3Dプリンタなどが使えるファブスペースも作られ、その進化は止まらない。SFCのメディアセンターの自由度を支えている理由の一つには、同センターが蔵書「保存」義務を負わず、蔵書を常に整理できる性格を持っていることもあるだろう。蔵書が増えればスペースも減るため、蔵書保存機能は他キャンパスに委ね、しかし他キャンパスなどからも図書を借りられるのは、大きなメリットとも言える。2019年度、SFCのメディアセンターでは、1階を24時間オープンする試みも時期限定で行っており、さらなる進化が期待されている。

だが、世界には様々な進化系図書館がある。

例えば、筆者が2017年度に在外研究を行ったフィンランドの図書館は、図書館の概念をはるかに超えるものだった。まず、筆者が所属していたヘルシンキ大学は図書館を一般開放しており、一般住民や観光客も何の手続きもなく図書館に入れ、開放的なスペースやカフェでのんびり過ごす姿が見られた。

また、フィンランドで現在、話題になっているのが2018年にオープンしたヘルシンキ中央図書館「オーディ」である。極めて現代的な美しい外観は、一見図書館には見えず、中も開放的なスペースが多く、子供から大人まで楽しく日常を過ごせる市民憩いの場となっている。その開放性を可能にしているのが、SFCのメディアセンターと同様に、蔵書の保管義務がないことである。蔵書は10万冊と決して多くはないが、選書と調整はバランスをとりながら極めて慎重に行われているという。加えて、オンラインサー

ビスと図書仕分けロボットにより、ヘルシンキ周辺地域すべての約340万冊にのぼる図書などが利用できるのも、利用に不足は生じない。また、「ものづくり」スペースが充実しているのも特徴だ。3Dプリンタ、大判プリンタ、ミシンスペース、ドラムやシンセサイザーなど音楽設備が整う防音の音楽スタジオ、最新のゲームが完備されたゲームルーム、会議室などが完備され、また3Dプリンタの使い方や裁縫などの講座も開かれており、市民は知識がなくても「ものづくり」を始めたり、クリエイティブな活動に着手したりする機会が与えられているのである。

こんなオーディは、市民の夢で作られたとされる。つまり、市民の要望を受けて、様々な設備が図書館に設置されたのである。だが、世界的に高評価を受けているオーディは実はSFCのメディアセンターとかなり似ている。この点は評価されるべきだろう。

そもそもフィンランド人は図書館、読書が大好きだ。人口約550万人のフィンランドには737の公立図書館があり、同国民は1年間に6800万冊の本を借りており、1人当たりに換算すると12冊以上にのぼる。2017年に、フィンランドは図書館サービスに関して、国民1人当たりにつき57ユーロ（約6820円）を支出しており、それは米国の2倍近い額だという。フィンランドは、2016年に「世界で最も識字能力が高い国」ランキングで第1位に選ばれた（<https://webcapp.ccsu.edu/?news=1767&data>）。同ランキングは、国民の読み書き、それを支援する図書館や新聞などのリソースの豊富さを指標としており、トップ5を北欧諸国が占めた。

このように考えると、図書館の充実は、国家の姿勢と国民の意識と強い相互関係にありそうだ。良い図書館が、国民の読書熱を高め、国民の強い読書愛が図書館を良くしているとも言えるだろう。そのような好循環を慶應義塾のメディアセンターにももたらしてゆきたい。